

## プロジェクト名：生涯学習活動における創造性育成プログラムの構築とその省察的实践

プロジェクト代表者：小澤基弘（埼玉大学教育学部・教授）

分担者：岡田猛（東京大学大学院・教授）

石井壽郎（東京学芸大学・准教授）

### 1. プロジェクトの目的

従来より創造性育成については、美術および認知科学それぞれに研究は進められてきてはいるが、領域横断的に研究がなされている例はない。美術領域においては特に制作学的視点から創造性への研究は蓄積されてきており（小澤）、同時に認知科学においても分担者の岡田において同じく研究蓄積がある。また、分担者石井も種々の生涯学習の場でワークショップを企画し実践してきた経験をもつ。創造性育成研究に対して異なったスタンスでこれまで関わってきたこの三者の蓄積された知見を統合し、広く生涯学習教育にも汎用可能な創造性育成プログラムを構築、実践しその結果を省察することが本研究の目的である。

### 2. プロジェクトの具体的実践とその成果

申請書記載の研究の具体的事項に従って研究の状況と成果を簡明に記するものとする。

#### 1. 美術館及び公的施設における「主観的素描（ドローイング）」を手だてとしたワークショップの実践（対象者は幼児から教員及び大人まで）及び画像・対話記録

これまで蓄積された知見に基づき小澤と石井によって以下のワークショップを行った。

①「ドローイング千枚プロジェクト」（2011年7月：入間市立公民館、同年8月：埼玉県立近代美術館、指導者：小澤・石井）：主観的素描であるドローイングを参加者全員合わせて一日（約4時間）で1000枚描くことを目標にしたワークショップを行う。入間市立公民館では対象者は小・中学生及び大人約50名であり、埼玉県立近代美術館では小中高校生を対象とした（約50名）。このワークショップは、ドローイングを制作することと、それらを振り返って自己省察することを大きな二つの活動の柱としている。特に振り返りタイムでの小澤及び石井による参加者とのドローイングを介しての対話が、各自のドローイングの省察を的確に促し、そこからいかに自己発見を導き出し得るかが、本ワークショップでは最も重要である。自己発見の感覚こそが創造性育成の最も重要な起爆材足りえるからである。どのような対話内容が各自の自己省察と自己発見を促し得るか、対話記録・画像記録を採取すること、それを後に分析することが、本研究のプログラムを精緻化する上では欠かせない。二回にわたる本ワークショップ実践によって、小・中・高校生及び大人のそれぞれの貴重なデータを獲得することができた。



ドローイング千枚プロジェクト

（会場風景：埼玉県立近代美術館）



ドローイング制作中の中学生



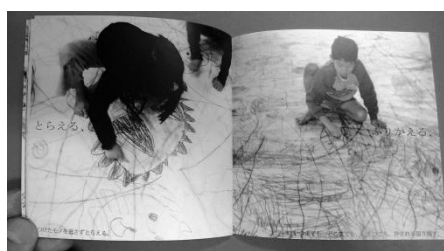
振り返りタイム（自己省察の時）

## ②「大画面落書き」ワークショップ（江東区文化センター他、指導者：石井壽郎）

幼児・児童（3～8歳児）を対象としたドローイング（落書き）ワークショップであり、分担者石井が2000年よりほぼ毎年一回のペースで継続している活動である。毎回の参加者は15～20名程度。このワークショップは描画法を施すというよりも、参加者が自主的に描画行為に至る意欲の促進へ重点がおかれデザインされた実践である。急激な都市化により環境の変化が著しく、プリティブな造形行為を行なえる環境が乏しくなる一方の現況、落書きでさえ容易に行なえない中で描画行為に日常性を回復させる事で、人の発達・成長さらに自己回帰の一端を援助する事を核に石井が中心となって実施してきた。これはまさに創造性育成を主眼としていると言えよう。この活動は「ドローイング千枚プロジェクト」にみられるような対話型自己省察は幼児・児童には難しいので、もっぱら活動風景の画像の記録に終始している。



「大画面落書き」ワークショップの様子



ワークショップの記録集「Actions」

## 2. 認知科学的指標に基づく記録の分析

特にドローイング千枚プロジェクト参加者に対する認知科学的指標からの創造性育成効果の測定のためのプレテスト、ポストテスト試案を岡田を中心として検討し確定した。これらのテストは平成24年度の本ワークショップにおいて実施予定である。また対話とドローイング表現との相関を質的に分析するための方法もまた検討した。具体的には記録された対話内容をKJ法によってカテゴリ化し、どのような内容が話された場合に次にどう表現が変化していくのか、その相関を俯瞰できるマップ作成案を検討した。この分析については、小澤が大学において半期12回で行うドローイングによる授業記録から検証した。したがって、この質的分析を上記のような一度限りのワークショップで行うことはできない。つまり、本プログラムは次年度以降、複数回の継続的实施が前提とされることも確認された。

## 3. 今年度の成果と次年度の計画

以上により、プレテスト、ポストテストによる量的分析と、KJ法を基にした対話進行と描画相関の俯瞰という質的分析との組み合わせによって、ドローイング（主観的素描）を手立てとしたプログラムが、創造性育成にいかに関係があるのかを検証することができると考えた。こうしたデータを理論的ベースにすることにより、「ドローイングと対話による自己省察」を軸にした活動が、幼児から大人までにつながる生涯学習を射程にした創造性育成のための一つの具体的プログラムとして、意味や効果が大きいという仮説が徐々に明らかになってきたと考える。次年度は、プレテスト、ポストテストを施行すること、また一回限りのプログラムではなく継続的に複数回行うことを前提として、再度同様のワークショップを行うことにより、そのプログラムの創造性育成効果の量的・質的分析を更に綿密に行い、上記仮説を立証していく予定である。